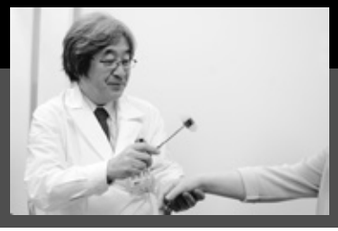
広告

提供:グラクソ・スミスクライン株式会社

「こんなときは神経内科に行こう!」

パーキンソン病と脳・神経の病気を知るセミナー in 東京



パーキンソン病は、脳の神経伝達に欠かせない「ドパミン」という物質が不足することで、ふるえ、筋肉のこわばり、動作の緩慢、姿勢反射障害などを引き起こす病気ですが、ほかの病気でも良く似た症状を示すことがあり、なかなかパーキンソン病と診断がつかないケースも見受けられます。このセミナーでは、パーキンソン病をはじめとする脳や神経の病気について、その専門家である神経内科のお医者さんが、皆さんにわかりやすく解説します。

受講者募集
参加費無料!
先着800名様

神経内科では神経学的所見に基づいて、神経や脳の病気を見つけ、治療します

神経内科医は筋肉から脳に至るまで、きわめて多岐にわたる疾患を、日々最新の知見を習得しつつ診療しています。

神経内科医は「全身を診るお医者さん」

全身に張り巡らされた神経は、脳を使って思い出したり考えたりする認知機能から、筋肉を使って歩いたり走ったりする運動機能、視覚・聴覚・温度覚・痛覚・触覚などの感覚器を用いた情報伝達機能、さらには呼吸・消化・循環・発汗など、意識せずに体が生命活動を続けるための自律神経にいたるまで、体全体がうまく調和し、機能するために休みなく働いています。神経内科医は、全身をコントロールする神経の不調を的確に診断する「全身を診るお医者さん」です。

チェック
こんな症状があれば神経内科へ

- □ 頭の痛み
- □ もの忘れ
- □ しびれ
- □ めまい
- □ ふるえ
- □ うまく力が入らない
- □ 歩きにくい、ふらつき、つっぱり
- □ むせる
- □ しゃべりにくい
- □ ひきつけ、けいれん
- □ ものが二重にみえる

⇦1つでも当てはまる症状が3ヶ月以上続いたら、神経内科にご相談ください。

頭痛から神経難病まで最善の治療法を提示

神経内科では、頭痛、認知症、脳卒中など、比較的患者さんの多い病気から、患者さんの少ない神経難病までを扱います。患者さんをていねいに診察して病気の実態を把握し、さまざまな検査を加えて原因を突き止め、患者さん一人一人の生活に即した最善の治療法を提供するのが神経内科医です。

日時:4月19日(日) 10:00〜12:00
会場:東京ミッドタウン ホールA
(東京メトロ日比谷線・都営大江戸線「六本木駅」直結)
共催:神経内科フォーラム
グラクソ・スミスクライン株式会社
後援:一般社団法人 日本神経学会

(注)神経内科フォーラムは神経内科の認知・啓発活動を行う任意団体です。

◆プログラム

10:00〜10:25	神経内科の役割(服部 信孝先生)
10:25〜10:50	パーキンソン病とその診断法について(下 泰司先生)
11:00〜11:25	パーキンソン病の治療について(馬場 康彦先生)
11:30〜12:00	パーキンソン病患者さんに寄り添う神経内科医(事前質問に答えるコーナー)

◆申し込み方法/お名前・ご住所・お電話番号・年齢・性別をご記入の上、FAXまたは郵送でお申し込みください。ホームページからもお申し込みいただけます。先着順で参加証を郵送しますのでお間違いのないようご記入ください。

ファックスの場合 FAX 03-5550-6550
郵送の場合 〒104-8176 東京都中央区銀座7-13-20
(株)日本経済社内
「こんなときは神経内科に行こう! 東京セミナー」係宛

※個人情報は厳重に管理し、本セミナーの案内状の発送以外の目的では使用いたしません。

ホームページ:「神経内科フォーラム」で検索してください。
http://www.neurology-forum.org/

[お問い合わせ先] TEL 03-5550-6263(平日10:00〜16:00)
[締め切り] 4月10日必着(先着順で定員になり次第締め切らせていただきます)

セミナー講師の先生にインタビュー

4月19日に開催する「こんなときは神経内科に行こう! パーキンソン病と脳・神経の病気を知るセミナー in 東京」講師の先生方にお話を聞きました。

◆パーキンソン病について

順天堂大学医学部脳神経内科・教授 **服部 信孝先生**

パーキンソン病は脳の「黒質」と呼ばれる場所の細胞が少なくなり、「ドパミン」という物質が少なくなる進行性の病気です。症状の進行には個人差がありますが、前向きに治療を受け、リハビリをすれば、病気になる前と変わりなく仕事を続けたり、入院などせずに自宅で過ごすことができる場合も多いので、明るく元気に過ごすことが大事です。患者さんやご家族のお話を伺いながら、一人一人に合った治療法を考えていくのが神経内科医の使命です。

◆パーキンソン病の症状について

順天堂大学医学部 脳神経内科
/運動障害疾患病態研究・治療講座・准教授 **下 泰司先生**

手がふるえたり、歩行時にはすくんでしまったり、歩幅が狭くなったりして転びやすくなります。また、表情が乏しくなったり、文字を書くとだんだん小さくなっていく(小字症)のもパーキンソン病の特徴です。神経内科医はこのような症状を早く見つけて適切な治療を行います。

◆パーキンソン病の治療について

東海大学医学部内科学系・神経内科・准教授 **馬場 康彦先生**

近年、パーキンソン病の研究が進み、新しい治療薬や治療法が次々に開発されています。神経内科医は、患者さんに的確な情報を提供するために、医療はもちろん、国や地域でのサポート体制などについても学んでいます。

グラクソ・スミスクライン株式会社
〒151-8566 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4−6−15 GSKビル
http://glaxosmithkline.co.jp